

中東・世界の動きと日本



参議院議員・中東調査会客員研究員 **大野 元裕**

再録編集文責：本誌編集部

当研究センターは地方自治を中心に、医療、福祉、地方分権、防災など時々の課題で講演会を開催してきましたが、今回は激動の世界に目を向け、中東問題をテーマにして参議院議員の大野元裕氏を講師に招いて講演会を開催しました。

皆様こんにちは。大野元裕でございます。参議院議員でもありますけれども、実はいろんなところで中東を視察させていただいておりまして、議員になってからも引き続き中東調査会で研究員をさせていただいております。

■中東に13年間滞在し、多くの人々と交流

さて、きょうは中東の話をさせていただきますが、私は長い間、中東にいました。13年ほど向こうにいまして、途中で2回、戦争にも巻き込まれた経験を持っています。そんな中で、様々な人と交流し、友達もできました。

イラクのサッダーム・フセインを、覚えていますか？ サッダーム・フセイン政権時代のイラクとか、まだ内戦前のシリアのアサド大統領の時代には、独裁政権ですから、拷問による取り調べもよくありました。実は私の友人で、バアス党という独裁政党で拷問を行っていた男がいました。もちろん、あとから分かったことですが、彼に聞いたことがあります。

「拷問って、どうやったのか？ どうすると効くのか？」と聞きましたら、彼は言っていました。「人間の生まれたままの自然な欲求をやらせないこと」。自然の摂理を妨げるといことが、実は

一番効くと言うのです。例えば、眠らせないとか、休ませないとか、体の自由を奪うとかが、それがすごく効くのだと聞いたことがあります。

さて、中東へ行かれたことのある方、おられますか？ ありがとうございます。どちらですか？

(参加者) イラクです

○大野 イラクですか。それは仕事ですか？

(参加者) いや、遊びです。

○大野 遊びでイラクに行ったんですか？ 私と同じように変わっていますね。実は最近、地方公務員の皆様にも、技術協力等でいろんなところに長く行っていただくこともありますので、もしかするとこの中に、将来イラクに行かれるという方もおられるかもしれません。きょうは、この中東についてお話をさせていただこうと思っております。

普通の日本人からしますと、中東って「物すごく遠いところにある」、「よくわからない」というのがほとんどの方のイメージではないでしょうか。中東というのは大体、普通の日本人で二つぐらいのイメージがあると思います。

一つは、「ロマンティックな中東」です。砂漠があって、月が出ていて、その上を何か白いオバQみたいな格好をしたおじさんがラクダの上に乗ってとうとうと行く。あるいはベリーダンスを踊っているとか、目だけ出ている衣装とか、そういうロマンティックな中東、オリエンタルな中東です。

もう一つは逆で、ここに写真が出ていますけれども、オサマ・ビンラディンです。怖い中東。何かテロがいっぱいあって、いつも殺し合っている



…そんなイメージ。大体、この両極端のイメージが多分、多いのではないかと思います。

ところが、私たちが実際に中東と接するとき、もしかするとそれぞれの自治体でも、将来テロとか、あるいは人質事件が、起きるかもしれません。そのときに、「何だ、あれは。わけわからん」では、やはり済まされたいと思います。

とても重要なことですが、ちなみに「中東」ってどこか御存じですか？「中東」は外務省の定義ですと、イラン、イラク、シリア、ヨルダン、サウジアラビア、イスラエル、レバノン、エジプト、リビア、バーレーン、アルジェリア、チュニジア、モロッコ、このあたりまでをいいます。

実は「中東人」というのはいません。中東って、何で「中ぐらいの東」か、わかりますか？これは、ヨーロッパから見て「中ぐらいに東」、あるいは「中近東」というのは「中ぐらいに近い東」、これが中東です。ヨーロッパから見ると一番遠いところを「極東」といいます。「極東」には、「アジア人」がいるかもしれませんが、「極東人」はいません。それと同じで、「アラブ人」はいますが、「中東人」はいません。でも、「十把一からげ」で

西洋の歴史観、西洋の地理観で言えば、中東というのは上記のエリアということになります。

■ヨーロッパとアジアを結び石油が産出する重要な地域

ですから、中東を定義する言葉というのはほとんどありません。その国によって、大体このあたりとなっています。先ほど私は「外務省の定義」と言いましたが、見る人によって場所が違います。モーリタニアを含める人もいれば、アフガニスタンを含める人もいれば、いろんな人がいますから、大体このあたりとなります。でも、大体このあたりの中東で、何かわけわからないことがよく起きるのも事実です。

地政学的にヨーロッパとアジアとアフリカを結ぶ、とても大事なところなんです。それから地下から、また変なものが出てきます。昔は地下から埋蔵金とか温泉が出てくると金持ちになりましたが、最近は日本も学校の敷地からごみが出てくると金持ちになる、こういう時代になりましたけれども。中東は石油が出てきます。まさに資源のない日本にとっては、好き嫌いに関係なく、つき合わざるを得ないのが中東です。

この中東には、ある程度共通なことがあります。それを一言でくくってしまえばイスラーム教です。イスラーム教の預言者はムハンマドです。預言者とは、神からの言葉を預かったメッセンジャーですが、イエス・キリストとかムハンマドといった人たちです。その預言者のムハンマドが帝国をつくりました。これが、中東です。イスラームもしくはイスラーム的な文化に、やはり物すごく大きな影響を及ぼしているというのが、このイスラーム教です。

イスラーム教には、スンニ派とシーア派があるのを聞いたことがあると思います。私の専門は、このシーア派の哲学です。その話をし始めますと、すぐにみんな寝てしまいますから、きょうは難しい話はやめておきます。ただ、イスラーム教や中東もそうですが、海外を知ろうと思う時、外国や異文化に接する時に、私たちは謙虚である必要が

あると思います。

「イスラーム教は夫人を4人持てるんだって。いいね」と言います。私は、あまりいいとは思いませんが…。あるいは、「豚肉食べてはいけないんだって。トンカツ食べられないんだ」「酒飲んではいけないんだって。かわいそうだね」例えばこんな話を、私たちはするかもしれません。

その時に、なぜ豚を食べちゃいけないのかわかりますか？ 今もそうですが、昔は冷蔵庫がありませんでした。「中東は暑い。豚肉というのは腐りやすい。だからそんなものを食べると、すぐに病気になる。だからだめなんだ」と、物の本にはそう書いてあります。確かに昔は食べていました。イラクのバグダットの、チグリス川の真ん中に島があり「オンム・ハナジール」といって、豚の母島です。昔、豚が住んでいて食べていたのです。

説明としては、そのようにみんな言います。しかし、実は違います。正解は、ただ一つです。何かと申すと、神様がだめと言うからだめなのです。要するに、説明はいりません。これが信仰です。それを私たちは理解してあげる。つまり、その宗教が何を信じているか、どんな宗教だろうが外から見たら、わけがわかりません。でも、「そういう感覚でいるんだ」というので、私たちと文化が接する。その上で説明を考えるということが、とても大事だと思っています。

そうしますと、先ほどの中東世界のいろんな側面があります。例えば、ロマンティックな中東、あるいは、テロリストが跋扈する中東があり。最近では、わけのわからないISとか、アル＝カーイダとか、ザルカーウィとか、日本人が殺されたりするのを見ていますと、まず暑いんじゃないか、怖いんじゃないか、貧しいんじゃないか、というマイナスのイメージが、ものすごく出て来るのではないですか。

しかし、これは全部、正しいけれど正しくないのです。何を言っているかと言いますと、例えば、イラクの南のほうに行きますと、世界最高気温を記録した場所があります。バスラという町で、港町です。昔、「シンドバットの冒険」という物語をテレビで放送していたのを覚えていますか？

あの時に港町があって、そこに大きな鳥が来て、シンドバットがさらわれたのがバスラです。あそこで57.2度という世界最高気温を記録しました。

ただ、ILO・国際労働機構が、「50度を超えたら、外で働いてはいけない」と言いましたら、なぜか中東のすべての国の温度計は、49.9度でとまることになりました。多分、永遠に57度は抜かれないと思います。真夏になって、イラクやクウェートのあたりで何が起きるかと言いますと、車で窓を開けて走ると、ドライヤーを顔に当てるとチリチリと震えがするような感覚というのでしょうか、あのような感じです。

一方で、イラクの一番北では、真冬になりますと2メートルの雪が積もります。スキー場はありませんが、サダム・フセインの息子がヘリコプターで上に行って滑り降りていました。つまり、北のほうは寒いのです。

怖いということについてです。ただ、私の隣には、テロリストは住んでいませんでした。私は、アパートというか、マンションのような所に住んでいました。逮捕された人がいました。イスラーム過激派という人には会いましたが、「私はテロリストだ」という人に、なかなか直接に会うことはできませんでした。これは、日本で申すと、まさに“フジヤマ・ゲイシャ”の世界です。確かに富士山はきれいです。芸者もいますが、皆さんの家の隣に芸者は住んでいますか？ あるいは、熊を撃つマタギもいます。皆さんの家の隣にマタギはいますか？ まさにこの世界なのです。

テロリストはいます。でも、隣のおじさんは何をしているかと言いますと、朝の7時半になると背広を着て、会社に車で行きます。日曜になると子供の手をとって、公園に遊びに行きます。特殊性を見ることは大事ですが、普通の人は私たちと全然変わりません。そのような両方の側面を持っているということを理解しないと、異文化というものは見られないのです。

■裕福な国と貧しい国民

それから貧しいということについてです。イエ

メンとかイラクもそうでしたけれど、エジプト等に行くと、靴を履いていない子供たちがたくさんいます。買えません。そして戦争で親を失って、路頭に迷う子供たちがたくさんいます。でもその一方で、例えばカタルとかアブダビ、アラブ首長国連邦、クウェート…このような国に行きますと、1人当たりのGDPが10万ドル以上です。居住者に外国人が1,000万人以上入っています。外国人が半分以上います。外国人を除くとその1.5倍くらいもらっていますから、1人当たり平均で年収1,500万円くらいになります。

そこで、驚いてはいけません。カタル人の一世帯には、平均で8人から10人います。女性は働きません。男性が1人だけ働きます。カタル人の場合、普通の平均年収が1億円くらいで、ものすごい金持ちです。それが普通です。

きょうはイラクを取り上げましたので、イラクの話の続けます。実はサダム・フセインの夫人が、日本に来たことがあります。90年の8月2日に、イラクはクウェートに侵攻して戦争をしています。その2カ月前に、夫人が来ています。サジダという夫人が、息子のウダイとクサイを伴って来ました。プライベートな訪問です。どのように来たかといいますと、当時一番大きな飛行機の「ボーイング747」を自家用ジェットとして来ました。

その夫人が買い物をされました。どこで買い物されたのか、私はよく知りません。三越とか和光とか、有名な所に行ったんでしょうね。彼らはどういう買い物をするのか？ 私も何度かそのようなケースに出くわしたことがあります。例えば、宿泊するために、帝国ホテルのワンフロアを借り切ります。その上のフロアーに何が来るかといいますと、三越と高島屋が借り切ってしまうのです。そして商品を全部持ち込みます。私も通訳をしていた時にびっくりしましたけれども、「その部屋全部と、こっちの部屋全部」と言って買うのです。本当にすごいです。

サダム・フセインの夫人が買い物をした後に、外務省に電話がありました。「ちょっと買い物をしすぎちゃって、飛行機に載らないので、船を仕立ててくれないか？」と話しているのです。確か

に日本の高級な車を、200台とか買いました。これを配るのです。そうすることによって、自分に服従を誓わせないと、殺されるという世界です。いずれにしても、上の階層の人たちはそれくらい金持ちだというのが、中東です。

私たちは、相対化して文化を見ると同時に、実は極端な所だけを見るのではなくて、両方の面をしっかりと見ていかないと、自分たちが理解をしていない文化に対しては、見えない所が出てきてしまいます。

そんな中東ですが、「そうは言っても遠くにある所だし、適当に殺し合っていてくれればいいではないか」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。しかし、好むと好まざるにかかわらず、たくさんの石油が中東にあるというのは事実です。しかも、中東の石油の半分以上は掘り出しが始められていません。なぜかといいますと、政治的なリスクが大きいですからです。より値段が高くても、例えばヨーロッパの北海油田から出てくるものを先に仕入れたほうがリスクは小さいのです。そこで手つかずのものが残っているというのが実状です。

■中東石油が世界経済に影響を及ぼす

それから、この中東の石油の価格は、基本的に世界のエネルギー価格を決めてしまいます。あるいは、経済もそうです。どういうことかといいますと、石油というのは世界の市場・マーケットの中で、単品で取引されているもののうち、最も多額の取引がなされています。つまり、石油価格が上がりますと、日本ではガス価格がそうですが、「ペグ」といって、ガスの価格の中に石油の価格の上下が組み込まれています。ほとんどのエネルギーが、石油価格が上がった瞬間にみんな上がります。

マーケットもそうです。石油は1日に8,000億バレルしか流通していません。ところがマーケットでは、その10倍の取引がされています。投資の市場で一番大きな物品ですから、石油価格が上がるとほかの商品、特に原材料が必ず上がります。

それから、これが上がるとマーケットが引きずられる。こういう状況で、石油の価格というのは今でも変動します。

きょうはあまり石油の話をしませんが、イメージだけで申し上げますと、世界中の石油はこれだけあります。この石油が「これだけあります」と言われても、どのくらいかイメージがわからないじゃないですか。そこで、富士山をちょっと切らせてもらいます。富士山を切って升にします。石油の埋蔵量というのは、今の価格で、経済的に掘れる量です。1杯、2杯と数えていったときにどのくらいあるか、おわかりになりますか？

実は、2杯くらいなんです。2杯しかありません。これが、なぜか偏在しています。どんなところにあるかといいますと、石油は動物や木の死骸というか有機物ですから、下に粘土みたいな底があって、上に空間というか軽石みたいなところ——こういうのがあるところに、溜まります。

なぜ日本にはないのか？ これは一般論ですけど、地震のあるところにはありません。なぜかといいますと、溜まっている下がボキッと折れてしまって、下にどんどん油が漏れてしまいます。石油の出るほとんどのところは、地震のないところだと思っていただいて結構です。そこで溜まったものをチュウチュウ吸い上げています。これが石油ですが、先ほど申し上げたように、それが富士山2杯分くらいはあるということになります。

特に日本は、すごくアンバランスです。いろんな国が、いろんなところから石油を輸入しています。日本だけは、8割を中東から輸入しています。これほど中東に依存している国は、アジア・太平洋全体でも、あまりありません。中国ですら半分以下です。ほかの国は、もっと少ないです。つまり、中東に石油が偏在しているだけではなくて、日本は中東に偏った形で依存してしまっているのが現実です。

今の日本のエネルギーの1次資源は、85%が化石燃料、つまり石油、石炭やガスです。仮に、“3.11”がなかったとしたら9割だったわけです。民進党でも今、例の「原発をとめる、とめない」という議論があります。原発というのはベース電力です

から、これをエネルギーの1次資源に対して化石燃料が占める割合が9割あるいは8割5分という現実の中でどう扱っていくかということが、多分とても大事なことです。残りの1割の再生可能エネルギーは、確かに大事ですけども、エネルギー資源全体から見ると、残念ながらニッチ（隙間）な部分です。そうすると、石油にどう対処するかというのが、日本の将来を決める上でもとても大事になってきます。

この石油ですが、中東に依存していること以外に、もう一つ問題があります。先ほど「石油の価格が上がると、ガスやエネルギー価格をはじめマーケットが動く」と言いました。実は私、経済産業省で委員をしていますが、とても不思議なことがありました。石油というのは需要と供給では動かないのです。

エネルギーに関する経済産業省の委員会でしたが、私は研究者時代に6年以上メンバーをしていました。そのときにいろんな議論がありました。すばらしい経済学者の先生が参加しているのですが、3年目に気がつきました。何に気がついたか。誰も「ことし何ドル」かを当てた人はいないんですよ。これも理屈は簡単です。需要と供給でコントロールされないということは、経済では測れないということです。

1973年に何が起こったか覚えていますか？ オイルショックです。トイレトペーパーがなくなったという時代です。1973年、このとき石油がなくなったわけではありません。第4次中東戦争というのが起こって、「アラブに友好的ではない国には石油を売らないぞ」ということがあったのです。そのときに、瞬間的に10倍以上に値段がポーンとはね上がり、最終的には3倍ぐらいで落ち着きました。普通、需要と供給で考えたら、実際には供給が減っていないのですから、価格が10倍になるわけがありません。

1979年に第2次石油ショックが起きました。このときはイラン革命です。これも政治です。1980年代の初頭から、イランイラク戦争が始まりました。“タンカー戦争”と言って、ホルムズ海峡を通る船にエグゾセミサイルを撃ち込みました。

1991年、湾岸戦争です。2011年の“9.11テロ”以降は、実はずーっと中東の情勢が不安定になるたびに価格が上がっていきます。下がるのはまた別です。ただ、上がるときは大体、中東がおかしくなっています。これがこれまでの経験則です。しかし、少し不思議なのは、中東が不安定になっても、石油が途絶えなければ、本当は価格にそんなに影響がないはずなのに、突然何倍にもなります。あるいは何分の一にもなります。これがこの石油の非常に大きな特徴です。

この石油が世界の市場、エネルギー価格や原材料価格に大きな影響を及ぼしてしまうということがとても大事なポイントだと思っています。

その中東ですが、安定してくれていればいいのです。でも、安定していません。図表1をご覧ください。中東は、アラブ首長国連邦とか、カタールとか、クエートといった国を除いてあとはみんな灰色やドット柄がついています。灰色は2011年の“アラブの春”で民主化運動によるデモが起きた国です。そしてドット柄は、その結果、国がひっくり返ったところ。それからちょっと黒いところは今、ISが勢力を持っている地域です。イラクもシリアも内戦状態で、ひっくり返っています。

つまり、そのように考えますと、ほとんどの国や地域がグチャグチャなのです。それがずーっと続いています。かつて中東の国々にいたのは、イラクのサッダーム・フセイン、シリアのバッシヤール・アサド、イエメンのサーレハ、エジプトのホ

スニー・ムバーラク、リビアにはカダフィがいました。このような独裁者がいたほうが、国はまだ安定していました。その方がよかったのではないかという議論も一部にあります。そこで何が起きているのか？ 少し見てみたいと思います。

ただ、個別にみますと、状況は全然違います。少しだけ共通したところがありますので、その点にふれてみたいと考えています。その前に、これからの皆さんのお仕事にも関係があるかもしれませんので、ぜひきょうは、少し宗教の話をしていただきたいと思っています。

■イスラーム教とは何か

イスラームの話をしたしたいと思います。イスラームというのは、一神教の一つです。ユダヤ教とか、キリスト教とか、イスラーム教は、神が1人で、その人がすべてをつくっている救済宗教です。最後は裁きにあって、天国に行くのか地獄に行くのかというのが大体、ユダヤ教だろうが、キリスト教だろうが、イスラーム教だろうが、一連の同じ構図を持っています。

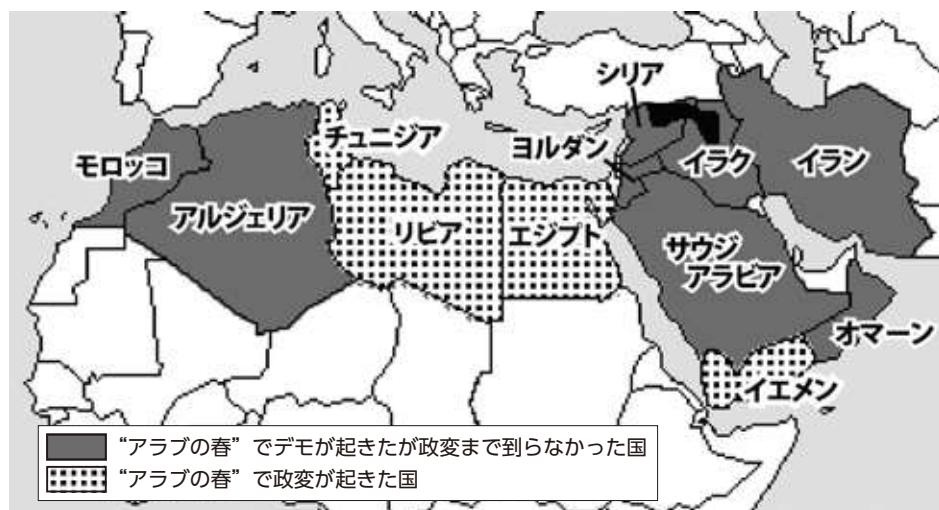
同じような場所で生まれています。ユダヤ教はユダヤの民。舞台だったのは、リビアやソマリアを含むこのあたりで、『出エジプト記』が表しています。キリスト教は、ナザレのイエスですから、エルサレムのあたりで生まれています。イスラーム教は、サウジアラビアのメッカ・メディナあたり

で生まれています。大体、同じようなストーリーを共通に持っています。

古い順にユダヤ教、キリスト教、イスラーム教となります。それぞれの前の宗教の悪いところをうまくフォローアップしながら新しい宗教にバージョンアップしています。それが今のイスラーム教だと考えてほしいと思います。

イスラーム教で特徴的な

図表1 「アラブの春」をめぐる中東の国々の状況



のが、政教非分離です。政教非分離ですから、もともとの原則として、政治と宗教が一緒です。どうということかといいますと、イスラーム教はおもしろいんです。先ほど「酒飲んではいけない」とありました。実際にコーランを読んでみますと、今の言葉で「ワインを飲んではいけない」と書いてあります。

そのあとに預言者・ムハンマドが「お前達アラブ人には宗教が必要だ。なぜ必要か？ 酔っぱらうわ、女は買うわ、賭けはするわ。とんでもないから、お前達は世界最悪の民族だから、宗教が必要だ」と言っているのです。すごく論理的でしょ？ そのときに、酔っぱらうことがいけないということと、ワインがだめだということのを合わせると、「あ、酒を飲んじゃいけないのか」ということになって、ワインだけではなくて、ビールもウイスキーも発泡酒もだめだとなります。

ところが、イスラーム教の教えは、社会全体を覆っています。例えば貯蓄とか、分配とか、商売のルールとか、そのようなものにも及んでいます。私はそのような思想を専門としています。ここで皆さんと取引したとして、例えばですけども、宮崎先生と私が契約書を交わして、そこで土地の売買を決めたとします。そのときにサインしますよね。これがインドネシアの宗派ですと、サインをした段階で（イスラーム教の法律がこれを定めているのですけれども）契約が成立します。ところが、サウジアラビアの宗派ですと、サインして、私がドアを開けて出ていく前に、「ちょっと待った、今の変えたい」といえば、OKなんです。こういうことを宗教が決めています。私たちの感覚と違うでしょ？

あるいは、貯蓄もそうなんです。例えば大金持ちが毎年5,000万円ずつ貯金をします。使ったのは1,000万でした。どんなに湯水のように使っても、やっぱり1,000万しか使えなかったとします。この残った4,000万円について、イスラーム教が規定しています。「10分の1払え」となります。なぜかといいますと、経済はお金が回るのが大事であって、お金がお金を生むから貧富の差が生まれます。ですから、貯蓄は禁止です。「リバー

とありますが、不労所得の貯蓄は禁止です。

その代わりに、この1年間決算してみても、動かなかった4,000万円分の400万円分は出しなさい。これを匿名で貧しい人に渡します。ですから逆に言いますと、なるべく使ったほうがいいんです。5,000万円もらってきたら、5,000万円使ってしまう。そうしますと、経済は回っていきます。「お金持ちがずーっとお金持ちである」、「お金に恵まれた機会がない人は、ずっと機会がない」というのをなるべく避けることを宗教が規定しています。私たちの宗教の感覚と全然違います。

それから、先ほどの酒の話で、ワインがだめだと話しましたが、「絶対にだめ」はありません。「絶対にいい」もありません。イスラーム教はおもしろいのです。普通の宗教は、あるいは法律は、「やらなければいけないこと」と「やってはいけないこと」を規定しています。「親殺しはいけない」、あるいは「いやいや、毎日礼拝しなさい」このように、普通のルールや宗教はどちらか決めています。

イスラーム教はおもしろいのです。「やってはいけないこと」「やらないほうがいいこと」「どっちでもいいこと」「やったほうがいいこと」「やらなければいけないこと」を定めています。例えば、たばこは「やらないほうがいい」に入っています。「やってはいけない」ではないのです。

例えばいまあげた五つのルールがあるのですけれども、その中で人間だけ違います。どうということかといいますと、犬は肉を食べますが、これを調理して、食べられないものを違う形で食べられるように変えることはできません。あるいは、石は石の形のままで、自分で自分のことを変えられません。ところが、人間だけは自由な意思があって「神様なんかいないよ」と言うことすらできます。自由であり、いろいろなことに対応ができます。

もう少し例え話で説明します。先ほど「豚肉食べてはいけない」「酒飲んではいけない」と言いました。私が砂漠を歩いていたら食べ物がなくなり、飲むものもなくなったとします。ところが、パッと見たら目の前においしいトンカツ定食と赤ワインの冷えたものがありました。すると、普段はこれを食べてはいけないし、飲んではいけない

んですが、最大限自分が神様に対する義務を果たすために「食べてはいけない」「飲んではいけない」ものが「食べなければいけない」「飲まなければいけない」ものになるのです。この自由意思を人間だけが持っています。犬はだめなんですね。「食べられないもの」が「食べられるもの」に変わりません。普段はトンカツを食べられないけれども、突然そのときだけは食べなければいけないものになるのが、実は神様が教えている自由意思です。

■イスラーム原理主義はなぜ生まれたか

なぜこのような話をしたかといいますと、「ジハード」と「イジュティハード」とレジュメに書いてあります。「ジハード」って聞いたことありますか？ 何ですか？

(参加者) ジハード…聖戦

○大野 そうです。聖なる戦いと書いて「聖戦」と読みます。しかし、実は、日本では「聖戦」と言われていますけれども、正しくは「聖戦」ではありません。

「ジハード」という言葉は、動詞のアラビア語「ジャハダ」という言葉から出てきています。「ジャハダ」は、努力するという意味です。「イジュティハード」も「ジャハダ」から出てきています。

「ジハード」は、身体で努力することを意味しています。「聖戦」も、戦いも身体で努力します。「イジュティハード」は、頭で努力することを意味しています。この「ジハード」と「イジュティハード」の両方があるときに、正しいイスラーム教徒としての道を歩めるというのが教えなのです。

この「イジュティハード」の一例が、先ほどお話しした「食べちゃいけないものがあつた」ときです。どんなに神様がそれを教えても、神様の最大の教えは「皆さんの力で、神さまの与えてくれた能力で、この世の中を最大限良くしなさい」ということなのです。そのためには、「砂漠の真ん中で冷えたワインとトンカツ定食がある場合は、食べなくてははいけない」これは「イジュティハード」なのです。

「ジハード」と「イジュティハード」の両方なければいけないと言っているのですが、ただ問題は、そこから原理主義っていうのが出てきました。原理主義というのは何かというと、こういう発想がありました。

イスラーム教というのは、彼等の中でとてもいい宗教でした。かつてはイスラーム教側から見れば、ヨーロッパやアメリカは影も形もありませんでした。ずーっと自分達より下でした。そうですね、昔は世界最大の帝国を築いていたのです。ヨーロッパは田舎で、十字軍のころに戦争をすると、イスラーム教側ではきちんとしたお医者さんがいるのに、ヨーロッパ側では祈禱師が祈りながら仕切っていたわけです。その程度のヨーロッパだったにもかかわらず、いつの間にか、突然それが逆転してしまった。何故だろう？ ここから始まります。

原理主義の人たちは、「ちょっと待った、原理に戻ろう。昔の最初のころは、自分たちは栄えていたじゃないか。神様の祝福を受けていたじゃないか。だから、原理に戻ろう」というのが原理主義です。これが実は、20世紀初頭にアルマナール学派といって、エジプトで始まってきます。

原理主義という正しい教えに戻ったら、「イギリスよりもエジプトが上になったか？」「フランスよりもカタールは上になったか？」「アメリカよりもサウジアラビアが上になったか？」…ならなかったのです。原理主義でみんな一生懸命に勉強し、一生懸命に敬虔になってみましたが、そうはなりません。そうしますと、「原理主義ではダメではないか？」と考える人が出てきます。

この原理主義が一生懸命に積み上げた理論的な支柱の上に出てきたのが、過激主義、暴力です。つまり、「もしも原理主義に戻れば、我々が神様の祝福を得られるのだったら、我々よりヨーロッパやアメリカのほうが立派なことをしているのではないのか。そんなはずはない」「あるいは我々が原理に戻って一生懸命に敬虔にやれば、アメリカやイギリスははるかに下に行ったはずだ。しかしそうじゃない。彼らはただ強いだけだ。とすれば我々は正しい原理も身につけるんだけど、そ

れだけではだめで、もう力でやるしかない」「しかし、アメリカやイギリスは強いから、ヨーロッパは強いから、やれるとすればゲリラ、テロだ」と、真正面からでは負けますから、「それが、我々のやるべきことだ」というのが過激主義なんです。

ただ、すごく厄介なのは、一度、原理主義で理論武装をしていることです。わけわからない“暴走族”のような話ではなくて、長年、立派な学者たちが原理主義を積んできているのです。

これは、成功したこの宗教の抱えるもろさなのです。先ほど、宗教が経済や政治まで規定している、政教一致だと言いました。なぜかといいますと、預言者ムハンマドが生きている時代に、世界最大の帝国を持ちました。預言者ムハンマドは、神様の言葉を借りて国のマネジメントをしなければなりません。行政組織や経済のルールをつくらなければなりません。これが実は、イスラーム教の仕組みです。

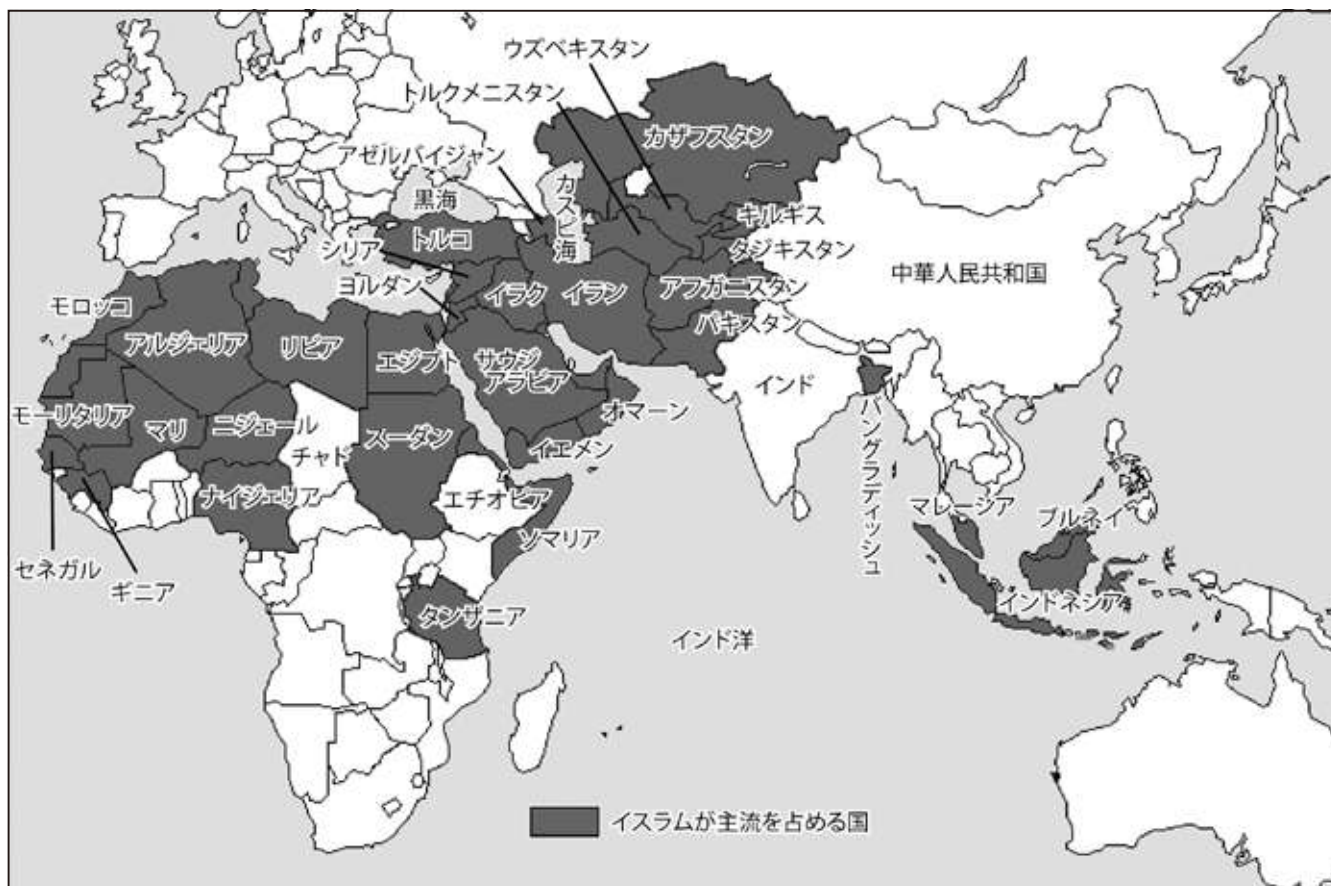
キリスト教は違います。残念ながら、最初は失敗した宗教です。キリスト教が始まるのはイエ

ス・キリストがはりつけになって、そのあと散り散りになった弟子たちが戻って来て、「あのようによにイエス・キリストが教えたではないか。愛はこうではないか」と議論を重ねてきたものです。ですから、そのキリスト自体は、実は帝国もなければ、別に経済もコントロールする必要はありませんでした。それよりも、現世界よりも愛だとか正しさとか、そのようなことを言えばよかったです。これは私たちの通常の宗教観ですよ。

しかし、イスラームは違います。大成功したマネジメントをやらなければなりません。そうしますと、その当時に大成功したイスラーム教の社会の歴史的記憶が残っていますから、先ほどの「ジハード」と「イジュティハード」を重んじる原理主義が出てこなければなりません。これがイスラーム教の非常に特徴的なところなんです。

図表2は、イスラーム教が大多数の主流派を占める国の地図です。つまり、これだけのところで、濃淡はありますが、イスラームの思想がある程度拡散しました。

図表2 イスラーム教が大多数の主流派を占める国



■イスラーム教は実は宗教の強制はなし

もう一つ重要なこととお話します。イスラーム教のイメージとは違うと思いますが、「宗教に強制なし」というのが原則です。パレスチナを見ていただくとわかりますが、何でパレスチナにイスラエルができて、キリスト教徒とユダヤ教徒とイスラーム教徒が共存してきたかといいますと、実はイスラーム教は「共存」が原則です。

イスラーム教のコーランではなくて、スンナという預言者の言葉でこう言っています。「お前たちはイスラーム教徒になれ。何かいいことがあるぞ。その証拠に、天国に行ったら、天国の3分の1はイスラーム教徒」と言っています。天国に入れる3分の1がイスラーム教徒ということは、3分の2は異教徒です。この点が、ほかの一神教と若干違うところです。

これには、実は弱点があります。阿部謹也先生（歴史学者、元一橋大学学長）の『中世教会の罪と罰』の中に書いてありますが、キリスト教は中東からヨーロッパに行ったときに、ヨーロッパをほぼ席卷します。ほとんどの場合、そこでみんなキリスト教徒にしてしまいます。そうではない人間は“魔女”になってしまいます。そのかわり、彼らが持っている“地域の神様”も取り込んであげます。例えば、サンタクロース。「セント」という名前を取り込んであげるわけです。パレスチナにサンタクロースがいるわけありません。地域の神様を聖人として、それを取り込む。つまり、「教義で妥協するかわりに、みんな入りなさい」というのがキリスト教や、それまでの一般的な宗教の形です。

イスラーム教は違います。「嫌なら入らなくていいよ。そのかわり教義は変えない」と。結果として、何が起こったかといいますと、キリスト教は変わっていきます。変わっていくというのは、悪い話ではありません。時代に応じて変わっていくということは、どんどん新しいものになります。もちろんイスラーム教も、ある程度変わっていますけれども、ただ、かたくななまでに原理を守っているうちに、キリスト教やユダヤ教というもっ

と古かった宗教のほうが、何となく新しくなっていました。イスラーム教は、ずっと前のままです。しかも、過去に大成功したという歴史的事実がありますから、最初のころが正しいわけですが、そのことが逆に足かせとなっています。

いい宗教に見えるけれども、マイナスポイントがあります。中東が不安定化していくということです。そんな中で、先ほど申し上げた「原理主義」みたいなものがありました。徐々に徐々にそれが、不安定化するたびに深刻化していくという状況があります。

■アラブの春はなぜ起こったのか

「アラブの春」というのが、どのようなきっかけで始まったか御存じでしょうか？ それはチュニジアの町で、違法に道で物を売っている若者がいました。それを警官が、「お前ダメだろ！」とやっていじめたのです。そうしましたら、若者が抗議をして、油をかぶって焼身自殺しました。それがネットで広がって、暴動に発展したのです。

政府を倒すほど、そんなにみんなが共鳴したわけです。チュニジアから発生して、なぜアルジェリアやイエメンまで、政権を倒すほどの大きな話になったのか？ 単に物を売っている若者が警官にいじめられて、焼身自殺したからでしょうか？ 違うんです。これには、実はみんなが共通で抱えている問題意識がありました。

とっても深刻な話なのですが、中東世界で出世するためには何が必要か？ コネです。ほとんどコネ。教育ではありません。特に湾岸のようなお金持ちの国では、教育レベルは高いです。日本人なんかよりはるかにいい大学に行っているというか、レベルや学歴が高いです。それでも彼らが出世するためには、コネが必要です。王様と関係があると、角地に土地をもらえとか、サウジアラビアですと農業の補助金がもらえるというようなことがあります。つまり、努力すれば上に上がれるという話ではありません。

私は、実はイスラーム過激派の人とよくお付き合いすることがありました。お酒を飲みませんの

で、彼らと夜にお茶を飲みながら話をします。彼らがものすごく喜ぶのは、松下幸之助の話、あるいは本田でも何でもいいのですけれど、「日本の中卒の人が一生懸命に努力して成功した」という話を、ものすごく喜びます。なぜかといいますと、あり得ないからです。

一番ひどいのは、学校の先生と軍人です。たくさん人を雇えるので、政府が一気に引き受けるのです。お金をばらまくことによって、基本的にほとんどの国では軍人、教員、役所の職員が多いですが、コネで全部採用してしまいます。部族単位で、自分たちが支持する人を採用してしまいます。それから外れた人は、どんなに頑張っても出世しません。

先ほどのチュニジアで物を売っていた子は一生懸命に勉強して、大学を卒業して、就職できないのです。当時、2割以上の失業率がありました。部族からはずれているため、一生懸命勉強してきても、職に就けずガムか何かを仕入れてきて、道で売るわけです。

さて、そこに来た警官は、何の教育もない「○部族」の人です。いじめるのです。「おまえ、きょう幾ら稼いだ？ 半分よこせ」殴る、ける。そういうことが毎日続いていました。相手が警官ですから殴りかかることもできずに、その子は逆上して最後は抗議の焼身自殺をしました。これが、実はアラブ世界で共通した背景です。

つまり、一部の特権階級と、決して恵まれることがない、何をしても絶対に浮かばれない人たち。このアラブ社会が長年かかえてきた構図をひっくり返したのが、先ほどのチュニジアの事件なのです。そこでデモンストレーションが起こって、政権を倒し、それが中東に広がりました。ほかの国でも若い人がみんな同じことを考えていたのです。

これが“アラブの春”です。しかし、次はエジプトだと「ホスニー・ムバーラクという独裁者が悪いに決まっている。あいつを倒せ！」となり、倒してみましたが、よくなりませんでした。民主的な社会を期待して、独裁政権を取り換えました。が、これまで培ってきた下部の構造が何も変わっていないということです。

そうしますと、どういうことが起きるかという、社会が不安定化していきます。それからナショナリズムとか、宗派とか、域内のライバル関係とかが入ってくるのですが、これだけではテロリストはできません。

■テロリストはどのように生まれるのか

テロリストがどのように生まれるかという話です。私は、テロリストのつくり方を目の前で見てきました。イラクで戦争が起きたとします。戦争が起きると、お父さんが殺されます。あるいはお母さんも、お兄さんも殺されます。孤児になると、どうなるか。中東世界は、比較的部族というか親族意識が強いので、そのようなケースでは通常その子を引き取ってくれます。普通は、そのおじさん・おばさんのところに行きます。ところが経済制裁等が強まってくると、どんどん貧しくなっていくます。

私が戦争後に再び戻った1996年のイラクでの出来事です。市場に行きますと、おばあさんが1人で座っていました。もちろんみんな、いろいろなものを売っています。私がおばあさんに関心を抱いたのは、おばあさんが座っている目の前に、1個だけ小さなものを置いて売っているのです。何だろうと思って見たら、水道のタップというのですか、ひねるところを外して、1個置いて売っているのです。

「何をしていますのですか？」と、おばあさんに聞きました。そうしたら、「売っているのです」「何でこんなものを売っているのですか？ 売れるのですか？」と聞きましたら、「いや、売れないのだけれど、ここに座っていると2日に1回ぐらい、だれかが御飯を食べさせてくれる」というわけです。

よくよく話を聞いていましたら、その家は比較的裕福な家だったようです。イラクも貧富の差はありましたけれど、上の階層は豊かでしたからね。週に1回ぐらいは夜にパーティーをするような家だったそうです。そのおばあさんは、ダンスパーティーをしていたそうです。自分の息子は、屈強

な大統領警護隊の師団のお偉いさんだそうです。ただ戦争が始まって、アメリカとの戦争で多分殺されています。夫は、どこかに行ってしまったのか帰ってきてきません。多分殺されたのでしょうか。そうやって1人きりになってしまいました。

大きなお屋敷があって、ドレス、絵、家具等がありました。食べるために、絵を売ったそうです。戦時下で絵はいりませんからね。次にドレスを売ったそうです、パーティーやりませんからね。ベッドも売ったそうです、最低限、床に寝ころがれますからね。電気を止められたそうです。テレビは見ないからいいです。でも最後の最後にすべて売るのがなくなって、止められたのは水道のタップ。そして、最後に不用になったものが水道のタップ。

でも、家だけは売らないのですって。お父さんが帰ってくるかもしれないから。恐らく死んでいるのだからけれど…。がらんだ荒れ果てた家が残っているわけです。その最後の、その大きな家の水道のタップを持って、おばあさんは座っているのです。恐らくいい家の娘でしょうから、働くということを思いつかないのでしょうか。これが戦争なのです。

このおばあさんは、甥が戦争で亡くなり、その娘を途中までは引き取っています。最後のタップの蛇口のひねり口を売る前に、そういう子を外に出してしまいます。「ごめんね。きのうまではお前のことを養っていたけれど、うちはもうそういうわけにいかない。一緒に首をつるわけにはいかないから、お前は外に行っておいで」と。

そう言われて、その子たちは何をするかというと、市場に立って、ビニール袋を売っています。私たちが野菜などを買うと、そのビニール袋を持ってきて、「これ5円で買って」と言ってビニール袋を渡すとか、あるいは靴磨きをすとかして彼らは過ごしています。学校で給食が出ている間は学校に行きますけれども、給食が出ないともう行けません。それよりは外で働くことになります。孤児の場合には、そうせざるを得ません。

そこにテロリストのおじさんが来ます。優しいのです、テロリストのおじさんは。「お前、靴は

いていないじゃないか。寒そうだな、おいで、服やるよ」「お金あげるから、これで御飯を、おいしいものを食べておいで」。優しいおじさんですよ、テロリストって。そうやって次の日も、「何だ、またここにいるのか。これで何か温かいものでも食べておいで」…そうしているうちに、子供たちはなついていきます。

そしてあるとき、おじさんは言います。「お前、何でこんなところにいるんだ？ そうか、お父さん殺されたのか。きっと殺したのはアメリカ軍だよ。おじさんはね、お前たちのためにアメリカ軍をこらしめている。いやいや、お前たちは何もする必要はないんだよ。一度来てごらん、何もする必要はないから」と。それで、ついて行きます。「ここで見張っているだけでいいから」…ボン！爆弾が破裂します。「ああ、よくやったね。お前にはきのうの小遣いの倍あげるよ」。徐々に彼らはテロの世界に入っていきます。

あるとき、その子たちのうちの1人はベルトを巻かれて、「これを引っ張ればいいからね。お前の親父が待っているから。お前はまだ子供だから、人がたくさんいるところに行って、これを引いてもわからないだろう」というように言われるわけです。

私は、そういった人たちに会ったときに聞きました。「ああ、そう。そんなことでテロリストをつくっているのか」と話をしたら、彼らに実は怒られました。「ちょっと待て、そんなに簡単にテロリストはできるわけではない。そんなに簡単にテロリストは死ぬわけではない」といいます。テロリストになって、自爆ベルトを巻かれて行く子供たちの3分の2は怖くて帰ってくるそうです。これが人間だと言っていました。

■フランチャイズ化したアル=カーイダ

ちなみにアル=カーイダというのを聞いたことがあると思います。「Tanzim al-Qaidat al-jihad」というのがアル=カーイダの正式名称です。Tanzim (タンジーム) というのは組織です。al-Qaidat (アル=カーイダ) というのは基地です。

Jihad（ジハード）というのは聖戦です。

聖戦の基地・組織なのですが、実はこの名前にすごく大事なポイントがあります。Tanzim＝組織する、al-Qaidat＝基地を――要するに聖戦の基地を、いろいろなところに組織しているのです。そこにセルといって、細胞をうえつけています。ときにはスリーピングセルといって、大きくするけれども、活動する前に一切表には出てこないといったセルもあります。もっと前線で活動しているところもあります。これが、いわゆるジハードとしてつくり上げた、アル＝カーイダの国際的な組織です。

興味深いのは、特にアル＝カーイダがそうなのですが、フランチャイズなのです。つまり、それをセブンイレブンでもいいし、ローソンでもいいのですが、そうやってフランチャイズ化していくのです。

例えばザルカーウィという人がイラクにいました。この人の組織がフランチャイズ化して、イラクのアル＝カーイダにいます。それからアイマン・ザワーヒリー――実は今のアル＝カーイダのトップですが、この人はエジプトでサダトという大統領を殺したジハード団を率い、アル＝カーイダにフランチャイズ化して参加したのです。ちなみに

ザルカーウィは日本人の香田証生さんを殺害しました。これらはアル＝カーイダに変わります。実はみんなフランチャイズ化してくるのです。

最初にこれを可能にしたのは、ビンラディンで活動資金をばらまきました。しかし、そうそうお金が続くわけではありません。それでフランチャイズ化したアル＝カーイダという名前を活用しリクルートをしていきます。

テロという言葉の語源はテラーからきています。恐怖。つまり怖がらせるということで、既に実はテロができています。そうすると、その現地で「アル＝カーイダ」とか「IS」と言うと怖いでしょう。「大野元裕」と言っても、だれも怖がりませんが、「アル＝カーイダ」なら怖がってくれます。おどしでも本気だと思ってくれます。

■IS（イスラーム国）の現状

それから次にISについてです。ISILとかISと言いますが、ISが斬新なのは、エリアを持っていることです。一番広いときに、シリアやイラクの相当部分を支配下におきました。今はもっと縮小しています。そこで、まるで国家のような指揮・命令系統を持ちました。あそこまで上と下がきちん



と整合性のとれた対応を行ったのは、国際的テロ組織の中では、私の知る限りこの組織だけです。ただし、ほかの地域でもISは活動していますが、そのような対応はできていません。

ISは中央本部からインターネットでいろいろな発信を行っています。その中に2年前の5月ごろだか6月ごろ、ノアの方舟のときの洪水というのがありました。再び大洪水が起きるから、もしもISに関連していて、正しいことをやっていれば、みんなは救われるということを書くのです。そこまでは、ただのプロパガンダです。

彼らがすごいのは、同時に周辺地域にあるダムをねらって取りに行くのです。砂漠ですから、みんな川沿いに住んでいます。ということは、ダムを爆破したら洪水が起きます。彼らは言行一致と言っては変ですけども、中央でつくっているプロパガンダを、現実の恐怖に変えることを現場で行っているのです。それを広いエリアで行っています。

このような手法を持っている組織は、これまでの国際テロ組織にはありません。彼らがつくったこのイメージが大事なのです。シリアやイラクでこれを行いました。アフガニスタンやイエメンなど、ほかの国でも同じようにできると思っていますが、内実は全然違います。それが今のISの現状です。

今、何が起きているかといいますと、アレッポは失ってしまいました。モースルもほぼ失っています。徐々にこの組織がなくなっているのです。今は、普通にテロ化しています。前線があって戦争しているのではなくて、より散発的で、だれをも無差別に殺害するような、テロ組織化傾向をISは再び強めています。これが今のISの現状です。かといってISをつぶすほど強い組織はありません。これが悲惨なところではあります。

何故それができないのかといいますと、各国の思惑が重荷になり、錯綜しています。みんなが協力すればつぶすことができるのに、それぞれ利益が違います。例えばスンニ派とシーア派の争いのケースです。本当は深刻なザルカーウィをつぶそう、本当は深刻なISをつぶそう、本当はシリアの

アサド政権をつぶしたほうがいいのではないかとみんなが総論として考えていても、「でも、それは自分たちにとってどんな利益になるか」ということを、みんなが考えています。

実は、スンニ派とシーア派の例だけではありません。きょうは単純化するために、スンニ派とシーア派の例でお話します。1990年8月2日の湾岸戦争以降、イラクのスンニ派はつぶれました。それにもなって、イランのシーア派の影響力が急速に台頭しました。そうしますと、近隣のより小さな国々のスンニ派の湾岸諸国——サウジアラビア、オマーン、カタール、アラブ諸国連邦、バーレーン、これらは不安になるわけです。「ちょっと待て、イラン、勘弁してほしい。イラクはつぶれちゃったじゃないか…」。

イラクにおいては、スンニ派からシーア派の政権に変わりました。シリアには、アラウィーというシーア派に近い政党がありますが、このアラウィーが政権を執っていました。ですが、シーア派の下に抑圧された多数のスンニ派がいたのですが、そのスンニ派が逆に政権を倒そうとして内戦になったわけです。それに対して、サウジやトルコが、「スンニ派、頑張れ」と支援します。イランやレバノンは、「アサド政権、頑張れ」と、シーア派を支援します。ここで真二つに割れてしまいます。

そこにISが入ってきて、三つ巴です。内戦を終結させるシナリオを誰も描けていませんから、だれかが強くなるように、こちらが弱くなるとこちらに武器を入れて、あちらが弱くなるとあちらに武器を入れて、とにかく争いを続かせたほうがいいのかという対応が続いています。

内戦が続き、違う勢力も入ってきています。そうしますと今度はシリアの政権がおかしくなりますので、イランとレバノンがシリアにテコ入れをして、アメリカが少し引く間に今はアサド政権側が強くなっているという状況です。要するに一つだけ覚えてほしいのは、もう既に社会がおかしくなっており、その中でテロリストが台頭しています。みんなが手を組めばつぶせるのですが、「誰も責任とらないので、とりあえず争いを続けさせ

ておきましょう」というのが今の状況です。これがあんまり長くなると難民が出てきます。さあ難民をどうしよう。あるいは自爆テロを行う人がこの中だけじゃなくて、何かほかの国でも自爆テロが起きます。実は今、そういう状況になっているということでもあります。

そのような中で、トランプ大統領が誕生し、どうなるのか？ 正直、私たちもまだわかりません。特に少し怖いのは、イスラエルとイランの関係です。トランプ大統領が相当イスラエル寄りになっています。私は昨年12月にアメリカに行って、トランプ大統領の政権の移行チームに会ってきました。

そこで話したときもそうなんです、ワシントンのトランプさんは何も考えていないと思います。しかし、娘婿のクシュナーはイスラエル寄りというか、ユダヤ人です。ケリーさんというオバマ政権の国防長官が、中央郡というイラク中部で掃討作戦をしているときに、イランから来た兵器でたくさん部下を殺されています。ポンペオさんというCIAの長官は、実は議員の時に対イラン強硬制裁を主導した人です。ティラーソン国務長官、首になったマイケル・フリン大統領補佐官、両方ともにかつて情報関係にいましたから、イランは敵です。実は今回のトランプ政権だけでいいと、イランが嫌いな人たちがそろっています。ですから、実際には北朝鮮が先だと思いますが、仮にイランが動き出したら、止める人が政権内にはいません。その点は物すごく凶式がはっきりしていて、中東の中でもイランのところが、動き出したら一番きついかんと思っています。

■日本は中東とどう関わるのか

最後に、日本に関わる話をします。中東と日本、伝統的には中東の人たちは日本人が大好きです。美しい誤解を含めて大好きです。「日本は立派でヨーロッパやアメリカに正々堂々と対峙している。これだけすばらしい国は見習わなければいけない」というようなイメージを持っています。「アメリカ本土を攻撃したのは、日本軍とアル＝カーイダだけじゃないか」と彼らはよく言います。い

や、本当に言うんですよ。そういう誤解があります。

あるいは、私がかつて制裁下のイラクにいたときに、イラクの政府の人たちが判で押したように同じことを言っております。イラクは、日本と物すごく商売をしていました。どのぐらいかというと、三菱商事という大きな商社がありますが、1980年代の前半ぐらいまで、三菱商事の一番大きな取引相手はアメリカでした。2番目はイラクだったのです。そのぐらいの取引をやっていました。ですから、自動車はすべて日本車ですし、マンションをつくったのは、みんな日本企業です。

そのときにイラクで話をしますと、サバイバルレート＝生存率といいます、「日本の車の生存率はすごい」と言うのです。制裁がかかっているので、部品が来ませんから、基本的にメンテナンスができません。ところが、救急車、パトカー、消防車など、基本的に日本車のほうが、ドイツ車より生き残っています。「いや、日本はすばらしい」という話を、彼らはしてくれます。そのような物すごく美しい誤解として、日本はすばらしいという状況なのです。

私が学生の頃、エジプトにいたとき、「おまえ日本人か？」と聞かれ、日本人だと言うと、「そうか日本人は大好きだ。」といひます。

しかも日本と中東は、エネルギーで相互に足りないものを補う関係があります。あるいは、よく言われますが、戦争でも日本は中東で手を汚していません。ちなみに第二次世界大戦中に、オマーンには潜水艦が1回行っていましたが、基本的には汚れていません。そのような状況が徐々に徐々に変わりつつあります。最近では日本人であるからテロリストが標的にするケースもあらわれはじめています。これも現実の問題なのです。

■日本への「美しい誤解」を活用し、国造りを応援する

日本に対して美しい誤解であっても持っているわけですが、それは日本にとってはいいことですから、それを持っている間に、日本が世界の安定

にどんな貢献をできるかが重要な点です。もちろん1人ではできません。あるいは、どこかの軍事的に大きな国と違って、日本が軍で抑えるのは、やろうとしても無理です。そうではなくて、その間に私たちが何をすべきかということ、今考えていく必要があると思います。

よく「日本も難民を受け入るべきだ」という意見があります。トランプ大統領になって難民を減らしたって、それでも5万人ぐらいアメリカに入学しています。日本は去年28人しか受け入れていませんから、全然レベルが違います。残念ながら、アメリカのほうが、その点では立派です。日本が難民受け入れを倍にしたとしても56人ですが、それすら難しいだろうと思います。

何が私たちにできるのかといいますと、国づくりとか、安定化だとか、こういうことはとても大事だと思います。先ほども申し上げましたが、普通の人がテロリストになることはほとんどありません。社会が不安定化して、お父さんがいなくてつらい思いをして、洗脳されてしまう。テロリストのつくり方を成立させないような、そういう世界というものが、私はとても大事ではないかと思っています。そのためには、もちろん経済や政

治もそうですけれども、それ以上に早期の封じ込めというのを日本はできていると思っています。

今、EUがこのような動きができません。EUの前の外務大臣、彼女とベルギーで会ったときのことですが、難民の話が大きくなる前から彼女たちは気づいていました。なんとかしないとイケないと思っていました。でもEUは動けないのです。EUは原則、全会一致だからです。つまり現実の問題が大きくなるまでは、彼らは動けません。ですから、イギリスもEUのことが物すごく不満なのです。EUは、あれだけ巨大な金食い虫の官僚組織があるのにもかかわらず動けません。

私たちができるのはこちらです。逆に危機が大きくなりますと、さまざまな制約もあって、日本はなかなか動くことはできません。そうなる前に、安定化の支援や危機の封じ込め、地域社会における収入源の創出——このような分野は、日本がとても得意なところなんです。しかも入っていても、日本は美しい誤解も含めて比較的によく理解されていますから。

そのようなことを最後に御提言させていただき、私の話とさせていただきます。

(この講演録は、事務局の責任で講演内容をまとめたものです)

講師紹介

おおの もとひろ
大野 元裕

民進党参議院議員（埼玉県選出）
中東調査会客員研究員

1963年埼玉県川口市生まれ

1987年慶応義塾大学法学部政治学科卒業、1989年国際大学国際関係学修士課程修了（中東地域研究専攻）後、外務省日本大使館専門調査員・書記官として、イラク、アラブ首長国連邦、カタール、ヨルダン、シリアに赴任する。

また、内閣府調査室西アジア研究委員、中東調査会研究員、東京大学教養学部・青山学院大学大学院の非常勤講師等を歴任。2010年参議院議員（埼玉選挙区）に初当選、現在二期目。